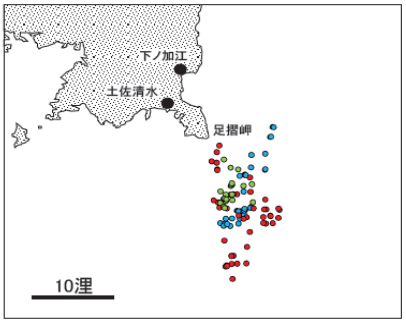
平成 27 年度海洋水産資源開発事業（ひきなわ：太平洋クロマグロ養殖種苗）の調査概要



調査船：壱号幸丸，千恵丸，第二敏漁丸
調査期間：平成 27 年 7 月 15 日～平成 27 年 8 月 31 日
調査海域：土佐湾周辺海域

調査の目的

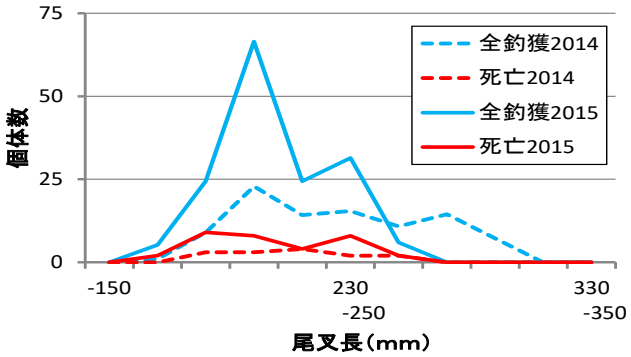
用船調査を通じて，‘ひきなわ’操業による釣獲から生簀への活け込みまでの太平洋クロマグロ（幼魚）の生残実態を把握し，生残率改善要素の洗い出しを行う。さらに，得られたデータを基に，当該資源の有効活用及び‘ひきなわ’漁業者の収益改善に資するための生残率向上に向けた漁具改良と操業技術開発の可能性を検討する。本年度調査では，調査期間が全漁期に亘るよう設定し，昨年度以上に詳細なデータを取得することを目指した。

本年度調査の主な成果等

（１）本年度調査も昨年度調査と同様，複数の台風や熱帯低気圧の影響により，十分な出漁日数を確保することができなかった。また，本年度も土佐湾周辺のヨコワひきなわ漁模様は良いとは言えず，出漁した 23 日中，ヨコワが全く釣獲されない日が 4 日あり，3 隻合計で 10 尾以上釣れた日が 10 日と少なかった。そのため，ヨコワ大漁の際の生残率を調べることは今年度もできなかった。

（２）生残率には年度間で差が無かったことから，両年度のデータを合わせて再計算し 81.4%（釣獲尾数 253 尾，死亡尾数 47 尾）の生残率を得た。尾叉長と生残率には有意な相関は見られなかったものの，平成 26 年度調査では，尾叉長 270mm以上の個体（計 21 尾）では死亡が見られなかったことから，あるサイズ以上になると死亡率が低下する可能性は考えられる。本年度調査では，尾叉長 270mm以上の個体は全く釣獲されなかったが，同サイズの個体が釣獲されていれば，79.1%より生残率が上がった可能性はあると思われる。以上のことから，土佐湾周辺海域のひきなわによるヨコワの生残率は 80～85%程度であると推定される。

（３）新仕掛けの導入や人為的要因の排除により，現状の生残率を向上させる可能性はあると思われる。例えば，‘たいわんよこ’と誤認された個体が全て活け込まれたとした場合，今年度の生残率は 81.0%となり，約 2%ではあるが生残率の向上が見込まれた。一方，新漁具導入による生残率向上の可能性は高いと考えられるが，土佐湾周辺のヨコワ漁期は 1.5 か月程度と短いため，同一漁期中に釣獲試験と針や擬似餌の改良を重ねる試行錯誤的調査で新漁具の有効性を示すことは難しいと思われる。



全釣獲個体と死亡個体の尾叉長組成

© Copyright Marine Fisheries Research and Development Center(JAMARC),Japan Fisheries Research and Education Agency All rights reserved
https://www.fra.go.jp/jamarc/